

サント・ブーヴと歴史

讃 井 鉄 男

——ポール・ロワヤルを知らずして、人間性を知ることにはできない。——（ロワイエ・コラルル）

（一）

フランス革命後王政復古期の政治論争と浪漫派文学の影響の下に近代的な歴史学として成立したフランス史学は、ティエリなどのいはゆる「物語的歴史」の文学的傾向と、ギゾーなどのいはゆる「哲学的歴史」の理論的傾向とを綜合したミシュレなどのいはゆる「綜合的歴史」として、十九世紀中葉に於て大成せられるに至つた。歴史家が同時に文芸に携はり、哲学的思索に耽り、或はまた政治に行動して、而もその交錯が特異な風格を生み出したのが、実に近代のフランス史学であつた。それは決して單なる史学の歴史ではなく、正しく偉大なる精神上の業績であると言はれねばならない。

由来、フランスに於ては、専門史家でない人々の中に、却つて優れた歴史家が伝統的に輩出していることは、注目すべき現象で

ある。古くは、ボシユエ、ヴォルテール、モンテスキューを初めとして、近代に於ては、シャトーブリアン、ラマルチヌ、ルナン、テーヌ等その実例は枚挙に遑がない。

こゝに考察せんとするサント・ブーヴも、亦実にその典型的な一例であると言へよう。近代フランスの評論史上に於けるサント・ブーヴの業績は、世上普く喧伝せられてゐるところであるが、彼が同時に卓越した歴史家でもあつたことは、比較的閑却せられ勝ちである。その透徹した人間心理觀察の方法を縦横に駆使して、かの史上に有名な十七世紀フランスの宗教運動であるポール・ロワヤル運動を描いた名著「ポール・ロワヤルの歴史」は、劃期的な評論の書であると同時に、優れた史書でもある。また龐大な評論集「月曜閑談」「続月曜閑談」は近世フランス史上の多数の人物を精彩に富んだ筆致を以て論評した評論集であるが、各編いづれも珠玉とも称すべき史論集である。然るに従来の史学史が同じ

く評論家でもあり歴史家でもあつたテーヌ、ルナンの史学上の業績を多く説きながら、評論に於ては勿論のこと、史学に関してもむしろ両者の先駆者の位置にある史家サント・ブーヴに多く言及しないのは、不当な閑却と言はねばならない。

哲学的史家と呼ばれるテーヌ、批評的史家と称せられるルナンの史学は謂はゞ「心理的史学」*histoire-psychologique*と形容することができよう。これは実に十九世紀中葉に於けるフランス史学一般の主要な傾向であつた。テーヌに於ては革命の心理、ナポレオンの心理、フランス国家の心理、ルナンに於ては宗教心理の研究が、最大の関心事であつた。然るに、歴史を根本的には人間心理の問題であると考へたフランスに於ける最初の人は、他ならぬ「ポール・ロワヤル史」の著者サント・ブーヴである。「イエス伝」「キリスト教の起源」の著者或はまた「英文学史」の著者の歴史思想、歴史敘述の方法の根源は、その多くをサント・ブーヴに発すると言はれる。のみならず、その後の多くの宗教史的、文学史的研究は多かれ少かれことごとく「ポール・ロワヤル史」の影響を受けてをり、なかんづく著名な「フランスに於ける宗教的感情の文学的歴史」の著者ブレモン師の如きは其の最も著しいものであらう。(ポール・ロワヤル史の影響については(Victor Giraud, *Port-Royal. Etudes et analyses* p.234—260) サント・ブーヴを歴史家たらしめたのは実に彼が優れた人間心理の研究家であつたが故である。

サント・ブーヴの史学上の業績を顧みる時、誠に興味深く思はれるのは、同時代の独逸の歴史家ランケの学風との著しい類似点

である。歴史心理に深い愛情豊かな関心を向け、歴史的人格の精神生活を深く探求し、人間の感情の真相を究め、その思想を感得し、これを洞察する驚くべき能力を備へた歴史心理の研究者ランケは、サント・ブーヴに最も近い歴史家であつたことに注目して、「近代史学史」の著者エドワード・フューターが次のやうに言つてゐるのは卓見である。

「個人心理に関するランケの芸術家的感覚と備忘録的史料に対する彼の批判的不信を採り、政治的歴史的問題への彼の瞑想的関心を除外するならば、彼の同時代のフランス人サント・ブーヴの歴史敘述上の活動を示す特徴を可なり正確に示すことができよう。而も歴史心理の探求者として多岐な点では、むしろサント・ブーヴの方がランケより優れてゐる。(E.Fueter, *Geschichte der neueren Historiographie*. S.486) 人間研究と人間認識は歴史の最も豊かな題目であり、これこそサント・ブーヴの没頭した一大研究であつた。

パリ郊外の世塵を離れた静寂の地に瞑想と祈りと研学の生活に憧れて集まつた少数の修道士の集団に端を発したいはゆるポール・ロワヤル修道院の宗教運動が、神学的にも、政治的にも、哲學的にも、はたまた文学的にも、道德的にも、極めて注目すべき十七世紀フランスの思想運動であることは、史家の等しく認めるところであり、この運動の思想的中心をなすジャンセニスムの教義のあらゆる知的道德的精髓を一身に具顯するバスカルの名と共に我々にとつても忘れ難いものである。(ポール・ロワヤル運動の概略については岩波世思潮に落合太郎氏の優れた紹介があ

る。)この史上特異な思想運動を後世に伝へるものには、既に嘗てジャンセニストの一人として親しくポール・ロワヤルに滞留し、その後背教者としてそこを去つたラシーヌが「ポール・ロワヤル略史」を書き残し、これはかのボワローをして、「フランス語を以て記された最も完全な史書」と称せしめたものであるが、この運動の歴史を後世不朽に伝へるものは、恐らくサント・ブーヴの名著「ポール・ロワヤル史」であらう。まことにこの書は「渺たる世外の一修道院の盛衰記に終始しながら、十七世紀思想の全般的起伏と文学的思想的英雄群の肖像を目に視、手に把る如く再現して十九世紀文芸の諸傑作の上に更に稀なる批評的史的モニュマンを加へたるもの、その偉功や洵に仰望するに足るものあり」(辰野博士評)と批評家をして嘆称せしめてゐるものである。

サント・ブーヴのこの書は周知の如く彼が一八三七年十一月ロザンヌのアカデミーに招聘せられて講じた講演をその後(一八四〇—一八六〇)出版したものである。

(「ポール・ロワヤル史」に関しては多くのサント・ブーヴ傳の説くところがあるが Victor Giraud の Port-Royal. Etudes et analyses は最も精細な研究である。)

一八三七年十一月六日、ロザンヌのアカデミーに於ける講義の開講に際して、恒例の如く聴講者に謝意を表した後、サント・ブーヴは劈頭先づ開講の辞を述べているが、これは主題に関する彼の意図を物語るものとして重要である。

「聴講者諸君、ポール・ロワヤルは一の偉大なる題目である。ポール・ロワヤルのもつ外見上特殊なまた實際上限られた性質は、それがこの世紀の全体に関係をもち、その全世紀を貫き、

それを特徴づけ、顯はにすることを妨げない。我々が今よりその拱門を潜らんとするこの最初は狹隘であつた修道院は、この偉大な世紀の終まで存続し、そこに多少とも作用を及ぼし、光を与へてゐる。尼僧院の改革、そして尼僧院に隣する少数の敬虔な隠士の団体が、如何にしてこの重要にして広範囲な地位と勢力を獲得したのであるか。諸君！これこそ、この講義が多くの方面に亘つて詳述し説明せんとするものである。(Port-Royal Tome I p.6)

自己の意図をこのやうに定義した後、サント・ブーヴは彼を選んだ題目に直ちに入る。「ポール・ロワヤル史」の第一部は「ポール・ロワヤルの起源と復活」と題されてゐるが、歴史家サント・ブーヴは先づ彼の実行せんとする計画と方法を明らかにせんとする。

「この研究の計画は簡單である。先づポール・ロワヤル修道院の起源を示した後、十七世紀の初にそこに行はれた改革の沿革が描かれるだらう。次いで、表面は未だ極めて微々たるものであるが、その精神、その性格、その結果に於て決して瑣細ではない僧院内部の諸事件が、一步一步辿られだらう。我々は僧院の生活に参加し、アルノーの家族となるだらう。そして歴史家にとつては何物も些細には思はれぬだらう。かくて、先づ歩みは狭く、緩やかに、主題の限られた方向に、僧院の仕切り格子の下で、未だほの暗い脇間の中で、始められるだらう。けれども、やがて、右に左に礼拝堂や窓が開かれるだらう。(中略)主題の中に深く進めば進むほど、教会の側堂や附屬物への頻繁

な往来が許されるだらう。教会堂や僧院のプランやこの修道院の地所の全部を我々が所有する時期が来るであらう。(中略)これを要するに、我々はあたかも我々がその伝記を書かんとするユニークな一人物に対するが如く、ポール・ロワヤルに対して振舞ふだらう……」(Port-Royal Tome I p.p. 2-30)

かくてポール・ロワヤル修道院の起源より筆を起し、先づアルノー一家に関する描写がなされ、次いで、この一家をめぐる人物即ちアッベ・ド・サン・シラン、アントワヌ、サングラン、アモン、ニコル等の主だった人物の性格描写がなされる。これらの人物やその他の人物は、そこではあたかもバルザックの「人間喜劇」中の人物の如く、我々に親しみ深いものとなり、彼等の性格、氣質、習慣、感情、奇癖を知ることが出来るだらう。多くの些細な特徴は、彼等の精神を我々に描いて見せる。「人間の眞の自然な族」(les familles véritables et naturelles des hommes)はあまり多くはない。この方面をいさゝか観察し、充分に多数の人間について実験を行つたならば、精神と素質の種々な性質が如何にして幾つかの型に、幾つかの主要なる項目に關聯して来るかを、我々は認めるだらう。我々が見、且つ理解したこれこれの知名の現代の人は、諸君に一聯の故人を説明し示す。といふのは、彼等相互の間の眞の類似は諸君には明らかであり、注意を惹くからである。それは全く植物に対する植物学の如く、動物に対する動物学の如きものであつて、そこには精神の博物学(histoire naturelle)精神の自然の族の方法が存する。充分に観察された個人は遠方からしか観察されなかつた種に直ちに關係をもち、それを説明する。

(Port-Royal Tome I p.55)

かくて、「サンシランのポール・ロワヤル」「バスカル」「ポール・ロワヤルの学校」「ポール・ロワヤルの第二の世代」「ポール・ロワヤルの終焉」と章を追うて敘述は進められるのであるが、本書全体の約五分の一を占める第三部「バスカル」に至つて、著者の史筆はいよいよその牙えを見せ、「プロヴァンシアル」の分析と「パンセ」に関する研究は、実に歴史的叡智と知識の典型と言はれてゐる。

さて、サント・ブーヴの「ポール・ロワヤル史」は史書として如何なる形態を備へたものであらうか、それは一言で云へば、宗教史の研究である、と同時に、文学史の研究である。そしてこの書の敘述をなすに當つて、著者の知識は極めて正確且つ広汎に亘つてゐる。當時に於て入手し得るあらゆる種類の資料を利用し、ポール・ロワヤル修道院の主なる隠士や作家の羅典文、仏文のほとんどすべての著作を涉獵し、これらの根本資料に附するに參照文献を以てし、また本書の決定版の完成するまでは、この修道院に關して公表されたすべてのものに注意を怠らず、逐次註や索引をその後の発見によつて補ひ、また種々の情報や教示を人々に仰いで研究の完成を期したのである。サント・ブーヴの旺盛な好奇心の対象となつたものは、ジャンセニストばかりではない。主題をあらゆる方面に拡げて、十七世紀の眞の百科全書を作るに努め、そこにはサン・フランソア・ド・サール、モンテーニュ、コルネイユ、マルブランシュ、モリエール、ラシーヌ、ボワロー、フェヌロンその他著名な思想家、文人が多数登場し、著者はこれらの作家

に關しては、常に直接原典に當り、且つ種々の版に注意を怠らぬ。のみならず、既刊の資料にのみ満足せずして、でき得る限り多数の写本を手に入れ、これを参照し、手寫し、その要点を採り入れてゐる。そればかりではない。彼はまた口碑による伝承を把握するに努め、例へばロワイエ・コラールに種々の質問を發し、和蘭に旅行し、ユトレヒトの小教会の最後のジャンセニストに照會し、その他ジェスイット學者の備忘録を刊行するなどに努めた。けれどもサント・ブーヴの知識が如何に良心的且つ精密であつても、この點に關して彼以後何等の進歩もなされなかつたといふのは勿論ない。その後の五十年間に於て多数の學者が十七世紀の一般史宗教史に關してあらゆる方面に亘つて探求を重ね、例へば、リュヌチエル、レベリオ、ランソン、ブレモン師、ユルバン師、オーギュスタン・ガゼエ、グリゼル神父、ルヴェスク師の手にならぬ修正を加へ、また既に著者自身も自分の著書の缺陷を意識してゐたのであるが、然しこれらは部分的な問題にすぎず、本書全体の価値をいさかも傷つけるものではない。

けれども材料の蒐集のみが眞の歴史家の能ではない。集めた事實を選択し、解釈せねばならぬ。この點に於て、十七世紀の宗教史の全体を研究するために、サント・ブーヴが選んだポール・ロワヤルは果して最も完全な觀測所であつたらうか、という疑問の生じ得る余地がある。彼はポール・ロワヤルの重要性を誇張し、謂はゞ「十七世紀の全体をジャンセニスムの聖なる方舟に乗せた」(André Bellesort; Sainte-Beuve et le XIX^e. siècle. p. 201)と

ふ非難を免れないのではなからうか。ポール・ロワヤルの隱士、尼僧、アンデエリック、サンシラン、サシー、アモン、アルノー、サント・エウフェミー、パスカル等に対して人が如何に尊敬、同情、称讃を惜しまぬとしても、彼等は十七世紀を貫く宗教の一大潮流の外に在つたことを認めねばならない。ジャンセニストの改革運動はローマ教会の非認するところであり、カトリシスムはジャンセニスムやサンシランが勝利を獲んと試みたとは異つた方向に發展したのであつた。従つてポール・ロワヤルを十七世紀の宗教史の中心となすことは、歴史の現實を歪曲することであり、主題を拡大し部分的研究の中に全体的研究を含ませるに著者が如何に巧妙であらうとも、それは謂はゞ遠近法を誤まらしめることであり、傍道のために大道を捨てることではなからうか。「ポール・ロワヤル史」は偉大なパスカルの存在にもかかはらず、サン・フランソア・ド・サルからサン・ヴァンサン・ド・ポールへ、サン・ヴァンサン・ド・ポールからボジエ、フェヌロンに通じる大道に立つてゐない。これを要するに嚴密に選ばれた題目と追求された広大な目的との間に秘かな矛盾が存在し、この矛盾が本書の全体に作用してゐることを見逃がすことはできない。その他本書の弱点として挙げられる諸點は著者がキリスト教的思想とジャンセニスト的思想を混合し、且つジャンセニストに左袒し、自己の英雄の弱点を緩和せんとしてゐること、ジャンセニストの主義や論争に同情を持つ結果、ジェスイットに対する批判が極めて不充分であり、最後にジャンセニストの同情と近代の反教会主義の先入見に左右されて疑義神學の問題に關心を示してゐない等の

諸点が注目される。

それはとにかくとして、歴史家サント・ブーヴがこの書の敘述をなすに當つて用ひた歴史的方法は如何なるものであらうか。その取扱ふ龐大な事實と原典との間に処して、彼の選択を決定した原理は何であつたらうか。彼は人物の精神状態を最も雄弁に表現するものを選び保存する。この宗教史の本質的にして特徴的な点は、それが「心理的歴史」(histoire psychologique)であるといふ点である。龐大な研究をなすに當つて、サント・ブーヴはポール・ロワヤルの精神そのものを再現せしめたと言へよう。またとにテーヌの言ふ如く、

「そこには行為と業績の奥に隠れた一つの精神が如何に正しく確實に、且つ含蓄深く、発見されてゐるかを人は見るであらう。修道院の争、尼僧の反抗の奥に、如何に人間心理の一大領域が見出されてゐるか、劃一的な單調な物語の奥に埋もれた五十人の人物の性格が各々独自の特徵と無限の多様性を帯びて白日の下に現れるかを、人は見るであらう。また神学的論文と單調な説教の蔭に、常に生き生きとした心情の鼓動、宗教生活の昂揚と沈滞、人情の意外な推移と変り易い混乱、周囲の世界の滲潤作用、恩寵の間歇的な勝利が、極めて複雑なニュアンスを帯びて識別されるであらう。」

(H. Taine, Histoire de la littérature anglaise
Tome I. Préface p. p. X—XIV)

「ポール・ロワヤル史」は宗教史の研究であると同時にまた文学史の研究である。それはポール・ロワヤル修道院の文学史であると共に、十七世紀フランスの文学史である。これ即ちこの書の

中に極めて多くの文学的な digression (余談、側道)の存する所以である。サント・ブーヴは元來評論家であり、評論を使命とし職とした。故に彼は彼の題目が提供する文芸評論の部分を拒むことができず、バスカルの「プロヴァンシアル」や「バンセ」の文学的形式に無関心であり得なかつた。けれども文学的敷衍がそれ自身提供されぬ場合にも、彼はそれを生ぜしめるに巧みであつた。かくてサン・フランソア・ド・サル・モンテーニュ、バルザック、コルネイユ、モリエール、ラシニエ等に関して最も興味ある頁を綴り、その中には宗教史の部分に於て見られた種々の長所即ち豊富な知識、透徹した批判、心理的洞察などが見られるのであるが、また反面それらの部分と全体との關聯が極めて脆弱であるという缺陷も免れない。

これらの文学的ディグレッション或はオールドツプルはサント・ブーヴに於ては如何なる目的を有してゐたかといふに、第一に、それは読者や著者自身にとつて主題の無味單調に変化を与へる。神学、論争、尼僧の争などは、著者の優れた歴史家の手腕を以てしても、その冗長さによつて眞面目な読者にも恐れをなさしめる危険が多分にある。故に読者や聴衆の興味を惹きつけておく必要があつた。第二に、そしてこの点が、著者の意図の斬新な点であるが、彼は常に道德史、宗教史を文学史から引離さずに一緒に取扱ひ、一方によつて他方を明らかにせんと試みた。このやうな考のもとに、文学的な敷衍や側道を回避するどころか逆にそれを求め、喜んで歓迎したのであつた。

「ポール・ロワヤル史」は恐らく著者の性格にも因るのであら

うが、その中に幾つかの相異なる主題が混在してゐて、全体の構成が統一を缺くといふ缺陷が指摘されてゐる。先づそれは——ラシーヌの「ポール・ロワヤル略史」に取扱はれた主題であるが——ポール・ロワヤル修道院本来の歴史即ち物語的・道德的・宗教的歴史である。次にそれはジャンセニスムといはゆる五箇條の命題に関する論争の歴史、即ち全く教義上の歴史であり、いささか政治的の歴史である。次にそれはポール・ロワヤルに關聯をもつ十七世紀の文学史であり、最後にそれはポール・ロワヤルの生活に關係をもつた主要な人物の歴史である。これらの題目が相互に何等かの關係をもつてゐることは認められるが、サント・ブーヴの著書の中にはこれらの相異なる見解が纏れ合つてをり、その結果全体の印象が混乱と紛糾を免れない。然しながら論理的・観点よりの缺陷は、他面、詩的・観点より見れば、却つて長所となつてゐる。著者がかもしもこの書の敘述に當つて直線的な嚴格な秩序に従つたならば、本書のもつ独自の魅力をなすあらゆる種類の傍道が禁じられ、その結果嚴格な構成の單調さを教ふものが失はれただらう。全体の構成をしばしば不安定ならしめる意外の脱線は、実は却つて本書の全体に極めて詩的な魅力と劇的な色彩を与へる結果となつてゐるのである。

「ポール・ロワヤルに關する私の著書の中で、私は一つの歴史ではなく、一つの大きなポルトレー（肖像）を描かんとする、即ちそれは修道院とこれらの隱士の団体のポルトレーであり、そして内部に於ては多くの特殊のポルトレーである」（Lettre à M. Chantelauze. 23. fev 1865）サント・ブーヴのこの言葉が示す

如く、彼の描かんとするものは、ポール・ロワヤルの歴史ではなく、そのポルトレーであり、最も顯著な境遇や人格の裡に標示しつつ彼の把握せんと試みたのは、実にポール・ロワヤルの精神そのものであつた。かの浪漫派の作家シャトープリアンの「基督教の精髓」に比較して、サント・ブーヴの「ポール・ロワヤル史」が一種の「ジャンセニスムの精髓」と称せられる所代である。

(二)

人が自己の天職に就いて思ひ違ひをし、或は天職と思はれるものを追求しつつ、持つて生れた才能の最もよき使用の道を発見するに先だち、探し求め、思ひ誤ることもまれではない。サント・ブーヴもこの摸索の一例を示してゐる。先づ彼は詩人たらしめて詩作を試み、また小説家たらしめて小説をも書いた。最後に評論家たらしめて、評論に専念した。けれども既に注目すべきことは、浪漫派の擁護と顯揚のために彼が最初に書いたものは何であつたか。それは彼の自然的無意識の傾向に従つて、文学史の著作、過去の喚起、「十六世紀フランス詩史」であつた。同様に後年「シャトープリアンとその文学仲間」を書いたサント・ブーヴは、生來の歴史家であり、歴史的精神の所有者であつた。後に偉大な世紀のフランスに於てルイ十四世に對する一の反抗運動として現れた強力な思想運動の研究に没頭した時、彼がそのポール・ロワヤルを考へたのも、他ならぬ歴史という形式に於てであり、晩年この歴史家としての色彩はますます濃厚となつて来る。けれども自分が歴史的精神の所有者であることを、彼は未だ充分意識し

ない。然し注目すべきは、過去の書に適用された場合は極めて確実であつた彼の判断は、現代の著作に対しては不確かであつたことである。実際彼は過去にのみ安住の地を見出した。描写し、物語ることに、彼は秀でてゐる。ことに説明することが問題である場合に、彼は自信たつぷりである。従つて、彼の文学研究は直ちに「文学的肖像」Portrait litteraireの形式をとるに至つた。そして「肖像」は「モノグラフィ」となり、そこでは、作者、作者の環境と時代が、すべての場所を占めて来る。実にプリユヌチエールの指摘してゐる如く、

「既にサント・ブーヴの個人的印象の裡に於て、作品の諸條件を識らんとする好奇心が、その作品の缺陷を非難せんとする満足や、それらを評価せんとする欲望、或はそれを樂しまんとする享樂よりも一層広い場所を占めたやうに見える。かくて純然たる主観的評論より心理的評論が分離し、既に明瞭な形を取るに至つた。そしてその傾向は、作品の傾向や吟味を作者の認識、作者の生活方法の認識に従属せしめんとするにある。」(Brunetière, Manuel de l'histoire de la littérature française)

作者の認識或は一層適當な言葉で言へば、人間の認識、これこそサント・ブーヴの没頭した研究であつた。かくして、彼の探求の範囲は次第に拡大せられ、彼の注目したものは、もはや單に文芸上の作家ばかりではなく、政治家、国家の元首、外交官などが彼のガレリーの中に入つて来る。もはや小説や詩のみを取扱ふのではなく、紀行文、備忘録、書翰集をも取扱ひ、もはや文学的表現にのみ顧慮することなく、人間精神の觀察に没頭する。「人間の生

活に属するものは、すべて彼の獲物に属する。そしてこのやうなものとして、歴史は自然に彼のものとなるのである。」(Gustave Michaut, Sainte-Beuve, p.180)

名著「月曜閑談」十六卷、「続月曜閑談」十三卷は、周知の如く、コンステイテューシオネル、モニトゥール等の諸新聞にサント・ブーヴが月曜日毎に寄稿した文芸評論を集録したものであり、評論家としての彼の令名を一世に謳はしめたものであるが、これはまた一面より見れば、優れた史論の宝庫であり、そこには、文芸復興期より王政復興時代更にはそれ以後に至るフランス社会の有名無名の人物がことごとく登場して来る。例へば考証的著述や備忘録の刊行がなされると、それは直ちにサント・ブーヴに評論の筆を執らしめ、一人の人物の生涯を探索し、一時代に対して光明を投じる機会となつたのである。伝記上の顛末から偉大な諸事件の説明が生じた。彼は單純なものより複雑なものへ、特殊なものより普遍的なものへと進む。タッチと修正、心理学的現実、人間的眞実の一種の攻囲によつて彼は研究を進める。一例を宗教戦争の時代である十六世紀にとるならば、カトリシズムとプロテスタンチズムの大葛藤を、彼はモンリユク、ドービネ、エチエンヌ・バスキエ、ラ・ボエシー、シュリー、アンリ四世などを通じて觀察する。そして最後に觀察された事実と蒐集された特徴の集積から浮び出て来るものは、一つの概観、一つの哲学、この龐大な混沌の鍵とも云ふべきものである。

この分析家、伝記研究者、人間資料の蒐集家たるサント・ブーヴの活動を誰よりもよく言い現してゐるのは、恐らくシャルル・

モーラスの次のやうな言葉ではなからうか。

「その晩年の二十五箇年或は三十年間に於て、この愛すべき老人（サント・ブーヴ）はあたかも神の如く敏捷に、力強く、諸々の思想や事件の紆余曲折に入り込み、最も瑣細な細部をも見逃がさず、その目録の詳細にして簡潔なものを作成した。彼は正確に問合せ、かつ我々に充分説明する。彼は伝記の傑作によつて歴史の無数の難題を明らかにする。次第次第に彼の精神の裡は部分的眞理のミューズの殿堂が整へられる。政治や宗教の貼札なしに、彼はあるところのものを、あるところのすべてを、彼の認知する如くに、彼の穩かな懇切にして、優雅な、だが内容豊かな躍如なる文章を以て記し、そこでは描きかつ感じさせることにすべてが協力する。」（Charles mauras, Trois idées politiques. Chateaubriand, Michel, Sainte-Beuve p.34）

こゝに歴史家サント・ブーヴの全貌が躍如として言ひ現されている。サント・ブーヴを歴史家たらしめたものは、実に彼が人間心理の探求者であつたからである。心理の研究者である彼は、思想と感情に向つてまづしぐらに進み、感情や思想の働きを発見した。かくて彼は人間によつてなされ、その人間的要素を所有してのみ理解される政治の内的原動力に到達する。このやうにして單純なる伝記的研究を通じて、彼はフランス史の最も錯雜せる部分を解明することができた。けれどもルナンやテースの如き大胆な綜合は彼の趣味に合はなかつた。それは彼の方法でもない。少くとも彼は繰返し説明して初めて獲得されるやうな歴史的概観に不可缺の材料を忍耐強い精細な研究によつて蒐めたのである。その完成に二十五年を要した彼の評論的著作はほとんどフランス史全

体を網羅するものである。一見脈絡なく、散乱し、断片的であるやうに見える彼の労作の中には、実は巨大なる綜合よりも一層多くの眞理が含まれてゐる。

現代フランスの歴史家として令名あるジャック・パンヴィルは優れた史論としての「月曜閑談」の価値を推奨して措かざる者であるが、彼がこの珠玉の史論集を評して述べてゐる言葉は、けだし歴史家としてのサント・ブーヴに対する最大限の讃辭であると思へよう。

「フランスの国民史を書くに先だつて、この国の歴史を理解せんと努め、そしてその目的のため多数の書を読破し、古人を恐らくこれによつて想像に描くことができよう。職業的史家は彼の物語る事件の原因を見出すのに常に必ずしも多くの勞をなさない。フランスの歴史の中には、漠然としてをり、不明瞭な部分が多々存する。そこではすべてが錯綜してゐる。もはや人は人間の動機も彼等の行為の理由も識別することができない。支離滅裂の纏れの前には知性も分析もその權利を放棄したかに見える。それにも拘らず理解せんと努める人は遂に光明を認めることに絶望する。その時、人が研究せんとしてゐる時代に関してサント・ブーヴの書いた或るものの中に求めるならば、必ずやアリアドネの糸が与へられるであらう。我々の過去に関して逢着した不明の箇所を明かにせんと欲する人に対して私が敢て与へんとする一つの助言は、「月曜閑談」を手につせよといふことであり、また私の敢て勤めんとする研究法は、他の到る処に於て理解し難い一事實に直面したならば、その事實に關係をもつた一人物を「月曜閑談」の索引によ

して探せと」(Quelques figures de l'histoire, Portraits extraits de l'oeuvre de Sainte-Beuve. Préface de Jacques Bainville. p. XI.)

フランスの歴史に関する多数のスケッチを書いた後に、サント・ブーヴがこの国の歴史の編纂に生涯を捧げなかつたことは、疑もなく極めて惜しむべきことである。彼の歴史は、必ずや最も現実的な、最も透徹した、かつ最も理解し易いものとなつただらう。それはミシユレの歴史ほどの閃きはなくとも、それ以上の整然たる秩序と、同じやうな直観に満ちたものとなつたであらう。

歴史こそは正しくサント・ブーヴの嚴肅な愛の最後の対象であつた。何等の歴史哲学もたぬ歴史家、だが細心にして注意深い敏捷にして熱情的な歴史家、これこそ、彼の最後の姿であり、彼の精神傾向の自然的帰結であつた。彼が求めたものは、や單なる芸術ではなく、人生そのものであつた。「ポール・ロワヤル」の歴史家がヒューマニストと呼ばれ、「月曜閑談」が「十九世紀のエッセー」、その著者が「十九世紀のモンテーニュ」と称せられる所以である。